慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.6, (2009. 1) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000006-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
9月8日	言語と認知班	Patterns in Language and Thought
9月15日	言語と認知班	英語教育の新時代―「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を超えて
10月26日	全体	人文グローバル COE 外部評価のための中間報告会
11月4日	哲学・文化人類学班	Logic in Church Decoration
11月28日	全体	グローバル COE 塾内3拠点合同シンポジウム“Evolution of Human Brain”
12月21日	言語と認知班	佐藤学氏言語教育講演＋対談

外部評価について

本拠点では、拠点の活動の評価のために外部評価委員会を設置しています。2007年度は発足年度なので委員会を開催しませんでしたが、本年度は書面での評価と発表会形式での評価を行いました。6名の外部評価委員のうち4名は発表会に参加していただき、忌憚のない意見を頂くことができました。発表会当日は拠点リーダーが全体の進行状況を概説し、杉浦社会学研究科委員長が大学院教育としての取り組みを説明し、中川文学研究科委員長が財政状態の説明を行いました。その後、7名の若手研究者による研究発表があり、質疑応答を行いました。評価は10項目にわたる評価と5段階による全体の評価で、これは後日すべての評価委員から提出されました。以下がその評価のまとめです。

1） 拠点形成の当初目的に沿って、計画は着実に進展しているでしょうか
すべての評価委員がほぼ順調であると評価している。特に文系と理系の自然な形での融合が評価されているが、そのような人材養成の実現は今後の課題であるとの指摘もあった。

2）研究活動において、新たな学術的知見の創出や特筆すべきことがあったでしょうか
NIRSと薬理の融合、児童、新生児研究への応用、動物の自己認知、図形論理、影の分析、など個別の研究が評価された。今後の研究展開への期待、あるいは懸念を指摘する意見もあった。

3）若手研究者が有為な人材として活躍できるような仕組みを措置し、機能しているでしょうか
すべての評価委員で、うまく機能しているという評価であった。プロジェクト科目のように大学院教育とうまく連携していることが評価され、また、ケンブリッジセミナーをはじめとする若手の海外派遣が評価されている。若手を研究者として採用していることも評価された。

4）拠点リーダーを中心とした事業推進担当者相互の有機的な連携が保たれ、活発な教育研究活動が展開される組織となっているでしょうか
おおむね拠点リーダーのリーダーシップのもとで十分なコミュニケーションが図られているという評価であったが、発表会を欠席した委員からは配布資料からではよくわからないという意見もあった。

5）国際的競争力のある大学づくりに資するための取り組みを行っているでしょうか
国外の有力な大学との海外連携拠、国際教育プログラム、国際シンポジウムを高く評価する意見が多かったが、国際競争力は結局、英文論文の数であるという指摘やインパクターも視野に入れた取り組みを指摘する意見もあった。

6）研究経費は効率的・効果的に使用されているでしょうか
設備にかなり支出しているが、MRIのリースなどの事情を聞いて納得したという意見が多かった。また、若手に対する支出も適切であるという評価もあった。欠席した委員からは配布資料からは判断できないという意見もあった。

7）国内外に向けて積極的な情報発信が行われているでしょうか
発表会を欠席した委員が配布資料では判断を保留した以外は、高く評価されている。特に、若手の発表支援を評価する意見もあった。ただ、HPについてはもっと充実されるべきだという意見があった。

8）国際連携の取り組みが積極的にされているでしょうか
すべての評価委員が取り組みを高く評価している。特にアジアでの拠点形成を評価する意見があった。

9）グローバルCOEとして、教育研究を通じた人材育成の評価、国際的評価、国内の関連する学会での評価、産学官連携の視点からの評価、社会貢献等が期待できるでしょうか
この項目も全員が高く評価しているが、内容的には、文系理系の自然な融合、国際連携、若手の育成が評価されている。また、今後の期待も大きいとしている。文理融合の若手育成のイメージを具体化して欲しいという意見もあった。

10）その他、お気づきの点がございましたら、ご記入ください
文系拠点でMRIを装備したことを評価する意見が複数あった。また、外部評価という制度を評価する意見、特に星助教の研究を論理と感性を統合するものとして高く評価する意見があった。また、今後のプログラム終了後の若手のキャリアパス支援をする機構を求める意見もあった。

（渡辺 茂）

公開シンポジウム「英語教育の新時代―『英語ができる日本人』の育成のための戦略構想を超えて」報告 （9月15日開催）

公開シンポジウム「英語教育の新時代―『英語ができる日本人』の育成のための戦略構想を超えて」は、2008年9月15日、520名の参加を得て、大盛会であった。5時間を越える長丁場も、議論の熱気におされ、あっというまに終了時間（40分ほど、予定時間を延長）となり、充実した1日となった。

今回のシンポジウムでは、津田幸男（筑波）、山田雄一郎（広島修道）、江利川春雄（和歌山）、三浦孝（静岡）、古石篤子（慶應）、斎藤兆史（東京）、大津由紀雄（慶應）（敬称略）の7名が登壇し、講演、パネル・ディスカッション、全体討論を行った。

シンポジウムの趣旨は、戦略構想の分析と行動計画の評価をしたうえで、今後の英語教育のあるべき姿を議論するというものであった。認知科学など関連諸科学（論理）の成果と教育政策や教室に

おける教育実践（感性）のバランスを念頭において構成された。

シンポジウムでの議論により、トップダウンに、しかも、数値で学校教育各段階での英語教育の目標を設定することの問題点が明らかにされ、同時に、外国語教育としての英語教育における母語の重要性の認識が強く打ち出された。

シンポジウムの最後に、今回の登壇者を中心に作成した、教育再生懇談会に対する要望書の概要を紹介した。この要望書は10月20日に懇談会の安西祐一郎座長に対して直接提出した。

このシンポジウムに関連する資料は大津由紀雄研究室のウェッブサイト http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/ からダウンロードできる。また、このシンポジウムをもとにした書籍を、シンポジウムを後援した慶應義塾大学出版会から2009年春に刊行する予定である。

12月21日には、日吉キャンパスJ14教室において、佐藤学さんの講演「言語リテラシー教育のポリティクス」と題された講演と佐藤さんと大津由紀雄の対談が開催された。（大津由紀雄）

GCOE ワークショップ　“Patterns in Language and Thought"（9月8日開催）

“Patterns in Language and Thought”は9月8日（月）　午後1時30分－5時に、慶應義塾大学三田キャンパス東館4階セミナー室で行われた。ワークショップではNick Enfield、Asifa Majid、今井むつみの3名が発表した。Dr. EnfieldとDr. Majidはオランダのマックスプランク心理言語研究所のシニアリサーチャーで、Majidさんの私との共同研究打ち合わせのための来日と、Enfieldさんが認知言語学会の招待講演のための来日の日程がちょうど重なったので、3人で言語と思考の関係について、異なるアプローチにより多面的に考える機会を持ちたいということで企画した。

Enfieldは言語使用の社会的側面から、話者の語や文構造の選択は談話の文脈によって大きく決まると主張し、ラオ語をはじめとした様々な言語での例を用いて主張を裏付けるデータを提示した。Majidは“break-cut”という、対象を破壊、変形させる動詞の意味領域で、英語、オランダ語、中国語、日本語をはじめとした多くの言語で領域がどのように言語化されているかを調べた実験をケーススタディとして、世界の言語で、動作イベントを言語化する際の、普遍的な知覚的、言語的制約についての理論を提示した。今井は助数詞、性文法などの文法カテゴリが対象の認識にどのような影響を及ぼすかという言語相対性の問題に関して、ドイツ語話者、中国語話者、日本語話者を比較した一連の実験研究を報告し、言語相対説に対する証拠を示すとともに、言語普遍的な概念的、知覚的制約の重要性を指摘し、言語相対説に関する新たな考え方を提示した。

このワークショップは日本認知言語学会の協賛もあり、学外から非常に多くの聴衆が集まって、セミナー室の椅子が足りないほどであった。時間も3時間半とたっぷりととったつもりだったが、それぞれの発表が一時間に及ぶものになり、フロアからの活発な質問、コメントもあって、予定時間を超えてしまい、ディスカッションを時間の都合で途中で打ち切らなければならなかったのが残念であった。

（今井むつみ）

研究員紹介

皆川泰代

２年前までJST研究員として21cCOEの施設で乳幼児発達研究を行っていましたが、10月より今度は特別研究教員としてグローバルCOEのプロジェクトに参加することになりました。赤ちゃんの音声言語の獲得、社会行動の発達とその脳内基盤について研究を行っていますが、本プロジェクトではこれらを「論理と感性の発達」という切り口で明らかにしたいと思います。本COEが提携するフランスENSそして理化学研究所との共同研究によってまだまだ謎の多い赤ちゃんの脳の仕組み、働きにせまっていくつもりです。

日根恭子

10月より、非常勤研究員としてお世話になっている日根恭子です。

顔の認知についての研究を行っています。特に、顔の部分に注目した部分的処理と、顔を部分に分けずに一つとして捉えたときになされる全体的処理が、顔の認知においてどのような役割を果たしているかを解明することに興味があります。グローバルCOEでは、引き続き顔の認知についての研究に携わり、「論理」と「感性」という対立する処理様式において、同様に対立する処理様式である「部分的処理」と「全体的処理」がどのように関わっているのかを実験的に検討していきたいと思っています。

今後とも、よろしくお願いいたします。

丹野貴行

ヒトは２つの事象の間に因果関係があるかどうかを、どのように判断するか。原因事象の有無をCと¯C、結果事象の有無をEと¯Eとそれぞれ書くことにしよう。これまでは、P(E¦C) – P(E¦¯C) で計算されるΔPに従うという、確率的な論理のみが注目されてきた。これに対し本研究では、両者の時間的関係におけるヒトの論理を検討する。強化スケジュール研究からの知見 (e.g., Reed, 2001) に従えば、たとえΔPは同じであろうとも、結果事象の直前に原因事象が多く存在した場合ほど、ヒトはそこにより高い因果関係を見出すことが予測される。本研究ではまた、予測されるこの結果を原因—結果事象の時間的距離の増加に伴う両者の連合の減少であると解釈し、これを行動的セルフコントロール研究と同様の割引関数によって数理モデル化することを試みる。

篠塚一貴

カワスズメ科の魚であるコンビクトシクリッドを対象に研究をしている。コンビクトシクリッドは一夫一妻で繁殖し、両親とも稚魚の世話をする。たとえば体を使って底砂とともに堆積物を巻き上げて餌の供給をしたり、はぐれた稚魚を口に入れて集団に戻したりする。これはどのようなメカニズムによるのだろうか？

哺乳類では、バソプレッシンやオキシトシンというペプチドホルモンが中枢性に作用して親行動を調節することが知られている。魚類における稚魚の養育や回収は、哺乳類が示す同様の行動とは独立に進化したものと考えられるが、その調節にはバソプレッシンの相同物質であるバソトシンが関わっていることを示唆する結果を得、現在はイソトシンについて実験を進めている。また彼らは、状況に応じて養育行動と回収行動の配分をすばやく切り替えていることから、そのような切り替えがどのように生じるのかについても興味を持っている。